

ジャコバイト辞典(8)

浦田早苗

T

 **Talbot, Richard, 1st Earl of Tyrconnell (1630-91)** — 初代ティルコネル伯爵、リチャード・タルボ

カトリックの軍人で、1685年ジェームズ2世によって伯爵位とアイルランド司令官の地位を受ける。1691年、ジェームズのアイルランド上陸に連隊を率いて駆けつけたが、ボイン川戦で政府軍に敗れ、その後新たな軍勢を準備中に脳卒中で倒れた。



 **Targe** — タージュ

ハイランダーの武具で、45-55 cmの円形の盾。一般的に合板に丈夫な牛革をかぶせ、銀や真鍮で装飾されている。中に腕を固定するアーム・ストラップと指を入れるストラップが付けられていた。1745年のジャコバイトの乱終結後は、使用と保持を禁止された。



■ ■ **Tencin, Pierre Guerin, de (1665-1747)** — ピエール・ゲラン・ド・タンサン

フランスの枢機卿で国务大臣。1721年から1743年まで、駐ヴァチカン大使。亡命中のジェームズ・エドワードの後ろ盾により、1740年に枢機卿、1743年にリヨン大司教に任命された。1745年のチャールズ・エドワードの進攻計画を事前に知らされていた、唯一のフランスの大臣であった。



■ **Tenison, Thomas (1636-1715)** — トーマス・テニソン

英国国教会の主教。1694年からキャンタベリ大主教職に就く。フェンウィック陰謀事件(ウィリアム3世暗殺計画)が多くの政治家やメアリ女王の妹アンにまで累が及ぶことを危惧して、審理中止を求めた1人。政治的にはウィッグで、ハノーヴァ朝成立の強固な推進者であり、1714年にジョージ1世の戴冠式を執り行ったが、翌1715年に死亡した。



■ **Threipland, David, 2nd Baronet of Fingast (1666-1746)** — 第2代フィンガスト准男爵、デイヴィッド・スレイブランド

スコットランド、パースのジャコバイト。1715年の乱の際、マー伯の軍に加わりシェルフミュアの戦いに参戦したため、父が叙されたフィンガスト准男爵位と所領すべて失い、フランスに亡命した。後に、彼の妻が領地を買い戻した。





Threipland, Stuart, 3rd Baronet of Fingast (1716-1815) — 第3代フィン

ガスト准男爵、スチュアート・スレイブランド

スコットランドの医師でジャコバイト。1745年の乱にはチャールズ・エドワードの侍医として弟デイヴィッドと共に参戦した。カロデンの戦い後フランスのルーアンに渡り、1747年帰国した。名医として名をあげ、1766年から1770年までエディンバラ大学医学部付属の王立医学会 (Royal Medical Society) の会長を務めた。



Tioram Castle — ティオラム城

ロッホ・シールに面するクランラナルドのマクドナルド氏族の居城。第14代氏族長アラン・マクドナルドがジャコバイトだったため、城は政府に接收され、要塞化された。1715年の乱が勃発すると、アランは城を攻め落とした上、再び政府のものにならないように城に火を付けた。それ以来、城は廃墟と化している。



Touch House — タッチ・ハウス


スターリングの4キロ西にある館。14世紀前半建てられ、15世紀後半タッチ家の所有となる。1745年9月13日、プレストンパンズの戦いを控えたチャールズ・エドワードがこの館で女主人エリザベスの篤い持てなしを受け、返礼としてクエイヒ (Quaich) と呼ばれるスコットランドの酒盃を下賜したという話が残っている。



 **Towneley, Francis (1709-46)** — フランシス・タウンリ


ランカシャー生まれのカトリックでジャコバイト。フランス軍に10年従軍した経歴を持って、1745年の乱に参戦。大佐としてマンチェスター連隊の指揮を執る。カーライルで捕らわれた後、ロンドンに送られ反逆罪で処刑された。彼の首は槍の穂先に刺されロンドンのテンプル・バーで晒され、その後、密かに一族によって奪い返された。



 **Towneley, John (1697-1782)** — ジョン・タウンリ

ランカシャー出身のカトリックでジャコバイト。処刑されたフランシスの兄。1731年からフランス軍に従軍し、1745年の乱に参戦し、チャールズ・エドワードと行動を共にする。カロデンの戦いで活躍するも敗れて、フランスに戻り、彼の地で翻訳者として名をあげ、30年留まる。その後英国に帰国し、ロンドンのチジックで亡くなった。



 **Towneley, Richard (1629-1707)** — リチャード・タウンリ

英国の数学者で天文学者。1690年の陰謀事件(アイルランドのジェームズ2世軍に呼応するフランス軍の英国侵攻計画)の首謀者の1人。逮捕状がだされたが逃亡し、1691年の恩赦法の適用外になったため、ジェームズ2世に対する忠誠心はさらに高まった。デッドビートエスケープ(反動のない振り子)の発明者でもある。




 **Townshend, Charles, 2nd Viscount Townshend (1674-1738)** — 第2代

タウンゼンド子爵、チャールズ・タウンゼンド


外交畑で手腕を発揮した政治家。ウォルポールと同郷で、彼の妹と1713年に結婚する。一時野に下るが、復権後は国务大臣として1730年までウォルポール政権を支えていった。政界引退後は、農作物の改良に専念する。蕪のタウンゼンド (Turnip Townshend) として名を馳せ、イギリス農業革命の発展に大きく貢献した。



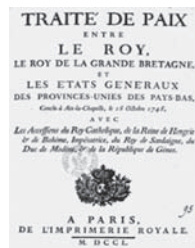
 **Transportation of prisoners** — 囚人の輸送

ジャコバイトの乱で捕われ処刑を免れた者は、7年の苦役労働罪を科され、主としてリバプールの奴隷商人に1人あたり5ポンドで売られた。ジャコバイトたちは、さらにアメリカ植民地や西インド諸島に運ばれ、7ポンドで売却されたという。



 **Treaty of Aix-la-Chapelle 18 Oct. 1748** — エクス・ラ・チャペル条約 (1748. 10. 18)

オーストリア継承戦争の英国とフランスの講和条約。マリア・テレジアのハプスブルク家継承が認められた。英国のハノーヴァ朝の正統性が再確認されると共に、チャールズ・エドワードのフランス退去が含まれており、彼はオペラ座へ向かう道で逮捕され、一時投獄の後フランスから追放された。その後、チャールズは1750年に変装して英国に渡り、ロンドンのセント・メアリ・ル・ストランド (St. Mary le Strand) 教会において英国国教会の聖餐を受けた。



**Treaty of Fontainebleau, 24 Oct. 1745** — フォンテーヌブロー条約**(1745. 10. 24)**

英国進攻中のチャールズ・エドワードを援助するために、ルイ 15 世とジャコバイトの間で結ばれた条約。この条約によって、ルイ 15 世は 4 隻の輸送船で多大な援助物資をチャールズのもとに送り込んだ。さらにルイ 15 世の英国進攻の命を受け、リシュリユー公が 1 万 5 千のフランス兵をチャールズの援軍としてブローニュ・シュール・メールに早急に集結させた。

**Treaty of Limerick, 3 Oct. 1691** — リムリック条約 (1691. 10. 3)

ジャコバイトとウィリアム 3 世との間で結ばれたアイルランド戦講和条約。1689 年 3 月 12 日、王位奪還のためフランス軍を率いアイルランドに上陸し進撃を続けたジェームズ 2 世であったが、1690 年 7 月 1 日のボイン川戦以降は敗色を濃くした。条約はジャコバイト軍に寛大なもので、フランスに亡命しジェームズ 2 世に仕えるもの 1 万 4 千、ウィリアム 3 世軍に仕えるもの 1 千、帰郷するもの 2 千という結果になった。

**Treaty of Ryswick, 20 Sept. 1697** — リスウィック条約 (1697. 9. 20)

1688 年に勃発したアウグスブルク同盟戦争の講和条約。イングランドは領土的に得たものはないが、ルイ 14 世はウィリアム 3 世をイングランド王と認め、1688 年以降フランスに亡命していたジェームズ 2 世を今後援助しないことを約束した。



 **Treaties of Utrecht, Apr. between 1713 and Feb. 1715** — ユトレヒト条約 (1713. 4-1715. 2)

スペイン継承戦争の講和条約。フランスが英国の王位継承に干渉しないこと、及び亡命しているジェームズ・エドワードを国外追放とすることが確認され、フランスとスペインが将来同一の君主を抱かないことを条件にルイ 14 世の孫フィリップのスペイン王位を認めた。他に英国はフランス領北アメリカ植民地の多くの部分を手に入れた



 **Tullibardine Castle** — トリバルディン城

スコットランドのオーチャルダー近くの城。アソル公爵の居城で、1745年の乱当時は、チャールズ軍総司令官のジョージ・マリが住んでいた。1747年に破壊され、現在はその姿を残していない。




 **Tullibardine, William Murray, Marquess of (1689-1746)** — トリバルディン侯爵、ウィリアム・マリ


スコットランド貴族でジャコバイト。1715年の乱、1719年の乱、1745年の乱に参戦。1745年の乱ではチャールズ・エドワードとともにスコットランドに上陸したモイダートの7人の1人。カロデンの戦いで捕らわれ、1746年ロンドン塔で処刑された。妻帯せず、子どもを持たなかった。チャールズ軍司令官、ジョージ・マリの兄。




U

 **Union Flag** — ユニオンフラッグ

イングランドとスコットランド同君連合の証として、1606年にジェームズ1世が制定した旗。1707年アン女王が国旗として採用した。イングランドのセント・ジョージ・クロスとスコットランドのセント・アンドリュース・クロスを組合わせたもの。1707年の連合王国誕生までは国旗ではなく象徴的な旗として使われた。

 **Union, Act of, 1707** — 合同法 1707年

イングランド王国とスコットランド王国が合併し、グレートブリテン王国を建国することとした法。スコットランドの親ジャコバイト感情を抑えるため、当時の首相ゴドルフィン伯爵とウィッグ・ジャントーが中心となって進められた。イングランドの大掛かりな買収工作も功を奏して、スコットランド側が態度を軟化し連合王国の誕生をみた。

 **Urbino** — ウルビーノ

イタリアの都市でローマ教皇クレメンス11世(在位1701-21年)の出身地。1717年7月から1718年11月ジェームズ・エドワードの亡命宮廷が置かれた街。亡命ジャコバイト宮廷はその後ローマのパラッツォ・ムティに移され、ウルビーノの館はジャコバイトの夏の離宮となった。



V

Valladolid — ヴァリアドリッド

かつてカスティーリャ王国やスペイン王国の宮廷がおかれたスペインの古都。スペインによるジャコバイトの英国進攻計画、1719年の乱の準備が行われた都市。5千の歩兵と1千の騎兵、大砲10門に1万5千の銃器を携え、1719年3月、スペインのカディス港を出帆したオーモンド軍は、この季節としては異例の激しい嵐に遭遇して、ケープ・フィニステル沖で壊滅してしまう。



+ **Vanbrugh, John, Sir (1664-1726)** — サー・ジョン・ヴァンブラ


イングランドの建築家でブレナム宮の設計者。スペイン継承戦争最大の勝利ブレンハイムの戦い(フランス軍の死傷者・捕虜は3万4千名に及び、仏軍総司令官タラーレ元帥も捕らわれた)の功績によって、アン女王からジョン・チャーチルに与えられたバロック様式の宮殿は、その敷地が約8km²に及ぶ。



 **Vernon, Edward, Admiral (1684-1757)** — エドワード・ヴァーノン提督

1741年3月、スペインのアメリカ大陸における主要貿易港を狙い、「Cartagena de Indias の戦い」を起こした提督。1745年の乱に際しては、リシュリユー公のもとブローニュ・シュール・メールに集結していたチャールズ・エドワード支援のフランス軍に対峙し、1745年12月21日、その侵入を諦めさせた。



 **Veitch, Samuel (1668-1732)** — サミュエル・ヴェッチ

スコットランド人の兵士で、カナダのノヴァ・スコシア(ラテン語で新しいスコットランドを意味する)の植民地提督。ユトレヒト大学で学び、卒業後はオランダ陸軍に入隊。1688年にオラニエ公ウィリアムに従って、イングランドに渡る。1689年ダンケルドの戦いに参戦。後に弟とともにダリエン計画(17世紀末のスコットランドの北米植民計画)に参加し、アメリカ植民地に移住した。



 **Vincennes, Château de** — ヴァンセンヌ城

パリの東方ヴァンセンヌにある城。14世紀—17世紀における国王の居城で、18世紀に牢獄として使われた。1748年、エクス・ラ・チャペル条約によるフランス退去に従わなかったチャールズ・エドワードが12月10日から12日に収監された牢獄。




■ ■ Vrai Crois — ヴレ・クロワ


サン・ナザール近くのロワール川に面した街。
1745年7月16日、7名の従者と共に小型フリゲート艦ラ・デュテュイエ号に乗りこんだ
チャールズ・エドワードがスコットランドに向け出帆した街。チャールズは7月25日、ついに
念願のスコットランドのハイランドに上陸を果たすのである。



W

 **Wade, George, Field Marshal (1673-1748)** — ジョージ・ウェイド元帥
アイルランド出身の陸軍軍人。1725年から37年にかけて、ハイランド地方に反乱防止のための約240キロに及ぶ軍事道路を建設した。1743年元帥として、オーストリア継承戦争のデティンゲンの戦いを指揮したが、1745年の乱でジャコバイト軍の進軍をくい止められず最高司令官を解任される。後任はジョージ2世の3男、カンバーランド公爵が務めた。



 **Wade's Road** — ウェイド将軍の軍道

1715年の乱後、ハイランドの反乱鎮圧を目的として当時将軍であったジョージ・ウェイドによって造られた軍道。1725年から12年かけて、約240キロの道が整備され、30の橋が架けられた。1745年の乱では、皮肉にもジャコバイトがこの軍道を遡り、エディンバラ入城を果たした。





Walkinshaw, Clementina (1720-1802) — クレメンティーナ・ワーキン

ショウ

1715年の乱に際しジャコバイト軍に加わったグラスゴーの裕福な商人の娘で、1745年のジャコバイトの乱でチャールズ・エドワードと出会い、その後も彼と関係を持ち1753年にチャールズの娘シャルロッテを出産する。チャールズは、彼女との暮らしにも飽き、過度の飲酒でだいにヒステリックになっていった。



Walpole, Robert, 1st Earl of Orford (1676-1745) — 初代オーフォード

伯爵、ロバート・ウォルポール

英国ウィッグの大物政治家。1701年初当選以降、政府の要職を歴任し、1721年から42年までは大蔵卿として首相の役割を担った。他国との平和を維持しつつ軍備の増強を目指した彼の対ジャコバイト政策は、18世紀前半の英国政治外交の基調となる。国王の信任が厚いにもかかわらず、議会の多数派でなくなったことを理由とした彼の大蔵卿辞任は、議院内閣制の成立に大きく関与した。



Walsh, Antoine (1703-63) — アントワーヌ・ウォルシュ

アイルランド出身の裕福な商人で、ジャコバイト。フランスのサン・マロやナントで海賊、奴隷貿易に手を染めていた。1745年の乱ではアイリッシュ・ジャコバイトのまとめ役として、チャールズ・エドワードに多額の資金を提供した。チャールズとともにスコットランド上陸を果たすも、チャールズに父ジェームズ・エドワードへの手紙を託されフランスに戻った。



 **Warren, Richard Augustus, Colonel (1705-75)** — リチャード・オーガスタス・ウォレン大佐

アイルランド出身のジャコバイト。フランス陸軍のアイリッシュ連隊の兵士で、1745年10月フランス援軍としてチャールズ・エドワードのもとに参じるとジャコバイト軍司令官マリ卿の副官に任じられ、ペンリスの戦いで勇名を馳せた。更なる援軍を求め一旦フランスに戻るが、カロデンの戦い後のチャールズを救うためフランス船籍 Prince de Conti で捜索を続け、ついに1746年9月チャールズの脱出を成功させる。



 **Warwick Hall** — ワーウィック・ホール

カーライル近くエデン川に面した館。1745年当時の城主ジェーン・ワーウィックが11月3日チャールズ・エドワードをもてなし、またドナルド・マクドナルドが反逆罪で裁かれている間、彼の家族が守られた場所としても知られている。現在はホテルとして宿泊できる。



 **Well of the Dead** — 死者の井戸

カロデンの古戦場にある小さな泉のあった場所。1746年4月16日のカロデンの戦いで、チャタン氏族連隊長のアラスデアール・マックジリブラら、多くのジャコバイトがここで斃れ、そのことを記した記念碑が建てられている。





Wemyss, David, Lord Elcho, 6th Earl of Wemyss (1721-87) — 第6代

ウィムス伯爵、エルコー卿、デイヴィッド・ウィムス
スコットランド貴族でジャコバイト。1745年の乱に参戦し、領地と称号を剥奪された。彼が記録した1745年の乱 — *A short account of the affairs of Scotland in the years 1744, 1745, 1746* — は当時の信頼できる一次資料となっている。彼の領地と称号は、子どもがいなかったため、1787年弟に返還された。



West Green House — ウェスト・グリーン・ハウス

ハンプシャーにある18世紀のカントリー・ハウス。ヘンリー・ホーリ將軍の本宅として建設され、現在はナショナル・トラストが管理している。ホーリ將軍は1746年1月のファルカークの戦いでジャコバイト軍に敗北したが、カロデンの戦いでは騎兵隊司令官としてカンバーランド軍の勝利に多大な貢献をした。



Westminster, Earl of, Alexander Murry of Elibank (1712-78) — ウェ

ストミンスター伯爵、アレクサンダー・マリ・オブ・エリバンク
ジャコバイトで、エリバンク陰謀事件の首謀者。計画では1752年11月に3百名のジャコバイトがセント・ジェームズ宮を襲撃し、ジョージ2世を拉致してフランスに連行するというものであった。時期尚早として計画は延期されたが、1759年ジェームズ・エドワードによってジャコバイト伯爵に叙された。





Wharton, Philip, 1st Duke of Wharton (1698-1731) — 初代ウォートン公爵、フィリップ・ウォートン

初代ウォートン侯爵トマス・ウォートンの息子で、ジャコバイト。グランド・ツアーで大陸を周遊中にジャコバイトに興味を持ち、1716年亡命中のジェームズ・エドワードと会話し、ジャコバイト貴族であるノーサンバーランド公爵に叙された。帰国後は隠れジャコバイトとして活動。父の功績もあって、1718年にグレートブリテン王国ウォートン公爵に叙された。



Wharton, Thomas, 1st Marquess of Wharton (1648-1715) — 初代ウォートン侯爵、トマス・ウォートン

1673年から下院議員に選出されたウィッグの指導者の1人。1688年ウィリアムへの招聘状を草稿し、ウィリアム軍に真っ先に合流した人物。革命後は王室会計検査官として、ウィリアムと政府との調整役をする。ジョージ1世の即位により王璽尚書に任命、1715年初代ウォートン侯爵に叙されたが同年死去し、息子のフィリップが爵位を継いだ。



White Cockade — ホワイト・コケード

1745年の乱で用いられたジャコバイト軍のシンボルとなったコケード。コケードとは一般的に軍隊などの帽章を指し、ジャコバイトの場合は白バラを表わしていた。中には標語「勇敢で慈悲深いチャールズ皇太子と共に」が縫い付けられるのが一般であった。

The Scottish White Cockade

It's said to have originated when Bonnie Prince Charlie picked a wild rose and pinned it to his hat.



O he's a rantin' rovin' blade He's a brisk and a bonny lad Betide what may my heart is glad To see my lad wif' his white cockade .The White Cockade



 **White Rose** — 白バラ


スコットランド議会は、1999年にエディンバラ出身のトニー・ブレア首相の主導により以下の開会宣言を持って復活した。「1707年3月25日以来、一時的に中断していたスコットランド議会を、ここに再開する」。出席したスコットランド国民党の議員の胸には白薔薇が付けられていたが、白バラがジャコバイトの象徴であったことを思うと意味深い。ブレア首相は退陣直後、英国国教会からカトリックに改宗した。



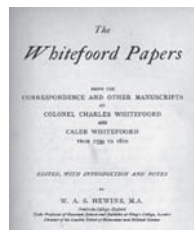
 **White Rose Day** — 白バラの日

6月10日はジェームズ・エドワードの誕生日で、「白バラが咲く1年で最も長い日」として、この日ジャコバイトは彼の2人の息子、チャールズとヘンリを表わす2つの薔薇もつ白バラを胸に付けて祝ったという。



 **Whitefoord, Charles, Colonel (1703-53)** — チャールズ・ホワイトフォード大佐

英国海軍の兵士。休暇中に訪れたスコットランドで1745年の乱に遭遇し、ボランティアの兵士としてコープ將軍のもとに参戦する。プレストンパンズの戦いで負傷し、捕虜となったが、間もなく釈放された。後にコープ將軍の戦術やカロデンの戦いの様子を詳しく述べたホワイトフォード文書を残した。



Wiay Island — ワイアイ島

スコットランドのアウター・ヘブリディーズ諸島にある島。島にはカロデンの戦い後、チャールズ・エドワードが身を隠した洞窟があり、それは「愛しのチャールズ王子の休息場 (Prince Charli's Rest)」として知られている。彼はここで数日間海水を混ぜて作られたオートミールを食べ飢えを癒やし、その後変装して逃げ回ることになるが、さらに2ヶ月後チャールズはフローラ・マクドナルドに出会い、助けられることになる。



Wild Geese soldiers — ワイルド・ギース連隊
主としてフランス軍に仕えたアイルランド出身兵士の軍団。1690年にルイ14世がジェームズ2世に貸し与えた6千名のフランス兵の代償として、組織された6千名のアイルランド兵士からなる。度々ジャコバイトの乱でフランスから派遣された。1745年に大陸での従軍が違法になり、フランス革命後は英国連隊に参入された。



Williams, Oliver — オリヴァー・ウィリアムズ
政府スパイ、Dudley Bradstreet (1711-63) の偽名。彼は、1745年の乱ではジャコバイトとしてチャールズ・エドワードらの信頼を得る。彼の「カンバーランド公爵が1万の兵士を率いて大陸から戻ってくる」という偽情報が、ロンドンまであとわずか2百キロと迫ったチャールズ軍をスコットランドに退かせる決定打となった。(右図はダービーにあるチャールズ像)



+ **William III, Willem van Oranje-Nassau (1650-1702)** — ウィリアム 3 世、ウィレム・フォン・オランジュ・ナッソー

南フランスのオランジュに領地を持っていたことからオレンジ公と称され、1672年よりネーデルラント共和国(オランダ)7州のうちの5州の総督として連邦国家を防衛する任を負っていた。1677年ヨーク公(後のジェームズ2世)の娘メアリと結婚、母が英国国王チャールズ1世の長女であり、血筋的にはジェームズ2世の甥で、メアリとは従兄妹の関係にあたる。1689年、イングランド王ウィリアム3世として即位した。



Williams-Wynn, Sir Watkin, 3rd Baronet (1692-1749) — 第3代准男爵、サー・ワトキン・ウィリアムズ・ウィン


1716年から下院議員を務め、1720年代初期には名うてのジャコバイトとして、ウォルポールの論敵となる。1741年の選挙でウォルポールは、彼の選挙区をターゲットとしたが失敗した。結局、この選挙で彼を落選させられなかったことが、ウォルポールの政界引退にまでつながった。



Wittelsbach, Franz von (1933-) — フランツ・フォン・ヴィテルスバッハ


ドイツの名門旧家ヴィテルスバッハ家の家督継承者。チャールズ・エドワードの弟ヘンリ・スチュアート枢機卿の死後、スチュワート王家の血筋はチャールズ2世の妹、オルレアン公妃ヘンリエッタを経てヴィテルスバッハ家に受け継がれている。現当主は、ジャコバイトからイングランド王及びスコットランド王、フランシス2世と見なされている。



 **Wogan, Charles (1698 ? -1752)** — チャールズ・ヴェガン

アイルランド出身のジャコバイト兵士。1715年のプレストンの戦いで捕らわれ、反逆罪で裁かれる前夜、マッキントッシュ將軍の脱獄計画でニューゲート刑務所を脱獄した「幸運の7人」の1人。その後フランス陸軍、スペイン陸軍を歴任し、准将にまでなった後、ラマンチャ州知事に転身。1745年の乱には加わらず、ラマンチャで亡くなった。



 **Wolfe, James (1727-59)** — ジェームズ・ウルフ

ケント州出身の英国陸軍兵士。17歳で歩兵連隊指揮官となる。18歳で参戦した1746年のカロデンの戦いでは、「軍人としての名誉」を盾に司令官カンバーランド公爵の、負傷したジャコバイトを殺せという命令に背いた。英仏7年戦争での活躍により32歳で少将に上り詰めたが、ケベック攻防戦の最中に敵の砲弾に斃れた。



 **Wyndham, Sir William, 3rd Baronet (1687-1740)** — 第3代ウィンダム准男爵、サー・ウィリアム・ウィンダム

トーリの政治家でアン女王治下、1712年に陸軍大臣、13年に財務長官と政府の要職を歴任する。サン・ジョンらとジェームズ・エドワードの復権を画策し、それが発覚後に一時収監される。ジョージ1世治下ではトーリのリーダー的存在として活躍し、アタベリ陰謀発覚以後はウォルポールの引き降ろしに精力を傾けた。妻は第6代サマセット公の娘キャサリンで、孫は後の首相、グレンヴィル男爵。




X

**Xenophobia** — よそ者嫌い

高緯度にあり北国のスコットランドは、イングランドに比べ貧しい土地であり、話される言葉の響きを含めて、イングランド人からは田舎臭く粗野なところと見做される傾向があった。例えば、当時出版されたサミュエル・ジョンソン編集の百科事典 (Dictionary of the English Language) で「カラス麦 (oats)」の項には、「イングランドでは馬の餌。ただし、スコットランドでは人の食べるもの」と書かれていた。さらに、そのスコットランド内でも標高 180m ほどを境にローランドとハイランドの区別があり、それは単なる地理的な区分にとどまらなかった。わずかな標高差は高緯度地域では決定的差異を生み、18 世紀当時ハイランドは穀物生産のほとんど望めない最貧の地であり、山と谷に囲まれた交通不便な土地故に特有の氏族社会と文化を醸成していた。ゲール語の混在するハイランドの言葉は、ローランドに住むスコットランド人からも一段低くみられていたのである。




Y

 **York, Henry Benedict Maria Clement Stuart, Cardinal-Duke of (1725-1807)** — ヨーク枢機卿公、ヘンリ・ベネディクト・マリア・クレメント・スチュアート

ジェームズ・エドワードの息子でチャールズ・エドワードの弟。ジャコバイトからはヘンリ9世と称されたが、自身は枢機卿として生涯を終え、英国王位の要求をしなかった。1789年フランス革命が勃発し、フランスにある資産を差し押さえられて仏王家からの援助が途絶えると、時の英国国王ジョージ3世は4千ポンドの年金を彼に与えた。



 **York, James, Duke of (1633-1701)** — ヨーク公爵、ジェームズ

ジェームズ2世即位前の爵位。7歳の時にピューリタン革命が勃発し11歳でヨーク公に叙され、1646年オックスフォード陥落後、幽閉の身となった。1648年に英国を脱出し、1660年の王政復古までフランスに亡命する。フランスでは軍籍に身を投じ、ヨーロッパ各地を転戦した。王政復古後イングランド海軍を創設し、海軍総司令官として英蘭戦争で活躍した。オランダから奪った新大陸の港は、ヨーク公にちなんでニューヨークと名付けられた。



Z

**Zivenbach, Baron de** — ジーヴェンバッハ男爵

1744年パリに現れたチャールズ・エドワードが使った偽名。チャールズがパリに姿を現わしたことにより、英国がジャコバイトの監視を強化したため、計画の実行が数日延ばされた間に大嵐がダンケルク港の17隻の軍艦と4隻のフリゲート艦からなるフランス艦隊を壊滅させ、1万のフランス軍将兵による1744年のフランスによる英国進攻計画が破綻した。



参考文献

- Cruickshanks, E. and Black, J.,(eds), The Jacobite Challenge (1988)
Cruickshanks, E. and Corp, E.,(eds), The Stuart Court in Exile and the Jacobites (1995)
Hill, C.P., Who's Who in Stuart Britain (1988)
Lenman, B., The Jacobite Clan of the Great Glen 1650-1784 (1995)
Lenman, B., The Jacobite Risings in Britain 1688-1746 (1984)
McKerracher, M., The Jacobite Dictionary (2007)
McLynn, F., The Jacobites (1985)
Roberts, J.L.,The Jacobites Wars (2002)
Sedgwick, R., The House of Commons 1715-1754 (2 vols 1970)
Treasure, G.,(ed.), Who's Who in Early Hanoverian Britain 1714-1789 (1992)
Treasure, G.,(ed.), Who's Who in British History (2 vols 1998)

参考 Web サイト

- | | |
|------------------------------|---|
| Historic UK | https://www.historic-uk.com/ |
| National Library of Scotland | https://www.nls.uk/ |
| National Museums Scotland | https://www.nms.ac.uk/ |
| National Portrait Gallery | https://www.npg.org.uk/ |
| The British Library | https://www.bl.uk/ |
| The National Archives | https://www.nationalarchives.gov.uk/ |
| The National Gallery | https://www.nationalgallery.org.uk/ |